

## その他

### わたしはシベリアの捕虜だった

山口県 東 面 勝

終戦のとき私たちの部隊は千島択捉島の天寧に駐屯していた。それよりさき昭和十七年から十八年にかけて北千島の幌筵島にいたが、アツツ島の玉砕やキスカの撤退はこの頃のことである。しかし戦闘は南方では華々しく、千島では時々米軍の艦砲射撃を受けるくらいで、我々はまだ弾薬も食糧も一年分以上の蓄えがあつてむずむずしていたものである。したがつて終戦の詔勅を聞いたときは半信半疑で、しばらくは何も手に着かない虚脱状態が続いた。

やがて上陸したのは米兵でなく、一戦も交えたことのないソ連兵であつた。そして武装解除、この日から約二年半の捕虜生活が始まつたのである。

内地に連れて帰つてやるという通訳の言葉で輸送船に乗せられたが、北海道に近付くにつれてだんだん怪しくなつてきた。船は北に向かつて走っている。樺太に燃料を積み寄港するのだという。さらに船は対岸のソ連領（沿海州の北）に停泊、名も無い港（あとでソフガワニという町と聞いた）に上陸させられた。こども食糧を積むためだとかいいながら、全然窓のない鍵のかかつた貨車に乗せられてしまった。そして貨車は昼夜の別なくゆっくりと動いたり停まつたり、充分な水も食糧なく一週間以上かけて、シベリアの奥地へ輸送されたのである。

今地図を見ると、確かコムソモリスクの近辺と思われる。ここにきてようやく騙し続けられたことがわかった。今までソ連の囚人の入っていた収容所に押し込められたのである。この辺は原始林ばかりで、数キロも離れたところに同じような収容所が所々にあるだけで、田も畑ももちろん民家もない。人間が住めるような所ではないのである。ここでは混成部隊が編制されて、満州や千島から連れてこられた部隊ごとに収容され、一つの収容所は確か十個小隊くらいだったと記憶する。一個小隊は六十人ばかりだったから、収容所には六百人以上ばかり収容されていたわけである。夢も希望もなくただ食べることに寝ること、そして早く祖国へ帰りたいと思うだけの生活、それはどうして生き延びていくかということにつながる。

今日も暮れゆく異国の丘に

友よつらかるせつなかる

我慢だ待ってる嵐がすぎりゃ

帰る日がくる朝がくる

「異国の丘」の悲しいメロデーは今でもあの頃の

ことを想い感傷に浸らせる。

ソ連は日本人の捕虜を有効に利用した。どんな仕事にもノルマ（基準）があり、捕獲した日本軍の食糧、衣服を少しずつ支給して徹底的にラポート（労働）させた。働かざる者食うべからずというが、病人以外その日の仕事量によって翌日パンの大きさが変わる。多く食べようと思えば能率よくしつかり働かなければならないのである。本来なら一人一人の仕事量によって評価するのであるが、それはむずかしいため一個小隊のノルマが与えられ、仕事の遂行量によって食糧が分配されていた。

当初、われわれの小隊は鉄道敷設の作業に従事した。トンネルを掘る代わりに山を切り開いていくのである。二個小隊が崖の両側から切り崩し、他の数個小隊が崩れ落ちた土砂を運搬除去するのであるが、わたしたちの小隊は崖崩しの仕事を命ぜられた。これが実に幸運であった。三人一組になって一人が命綱をつけて断崖にぶら下がって爆破孔を掘る。一人が頂上でこの命綱を持って操作し、他の一人は交代要員として焚き火を

しながら待機するわけである。危険は伴うが、零下何十度の寒さの中では焚き火しながら交代で待機できたのであった。そしてこの仕事のノルマは、爆破孔にダイナマイトを充填して爆破し、そのとき崩れ落ちる土砂の量による。孔の位置方向深さなどによつてその量はものすごい。爆破が終わつたら他の小隊が箱車で運搬する。沢山落とせば運搬の方は大変だが、こちらは監督には褒められ、悠々と焚き火しながら休憩できる。いつもハラシヨラボート（よく働くこと）でノルマは百パーセント以上、大きいパンをもらつたり煙草の配給も多い。

モスクワから高官の巡視があつたときなど、監督からハラシヨカマンジール（立派な指揮者）として紹介され、大いに面目をほどこしたものである。

しかしこのまま続けばあまり話はうますぎる。一年くらい経つた頃だつたらうか、そのころ、各小隊から大工経験者のみを集めた建築小隊が編制されていて、ソ連の監督将校らの宿舍の建築をやつていた。大きな原木丸太を積み重ねて、耐寒用に一分の隙もない家を

建てるわけである。総監督はわたしを呼んで「お前の小隊はよく働くからこの建築の仕事をやつてくれ」という。わたしはびつくりして「大工小隊は専門の人ばかりで、素人のわれわれではとてもこの仕事はできない」と断つた。しかしいくら説明しても分かつてもらえない。「崖落しではあれ程よくやつたではないか、きつとできる」といつてとうとう建築小隊にさせられてしまった。

案の定いくら頑張つてもうまくいくはずがない。仕事は捗らないし、折角積んだ丸木は傾く、監督はどなるし、ちよつと焚き火をすれば水をかけて消されてしまふ。パンは小さくなるし、みんなはますます働かなくなる。毎晩作業終了後呼びつけられ、「なぜやらないか」と叱られる。今までのハラシヨラボートは急転して部隊一のブローホラボート（悪い、働かない）になり下がつたわけである。

融通の利かないノルマの悲喜劇はこの外にも沢山ある。わたしはこのことで危うく強制労働に連れて行かれるところであつた。しかしこれがまた幸運のもとに

なった。

このころ、各ラゲル（収容所）からブローホラボーターばかり集まった一部隊が編制されて、その小隊長に連れて行かれた。ここでは今まで見たこともない農場があり、キャベツや人参や馬鈴薯を栽培する仕事を与えられた。一年以上生野菜を見たことももちろん食べたこともない我々はむさぼるように食べた。泥を拭っただけの人参が日本で食べた柿よりも美味しく、また缶詰の空き缶で蒸した馬鈴薯がおいしくて、みんな動けなくなるほど食べたものだ。お陰でビタミンCの不足による脚のたるさや栄養失調は幾分緩和されたが、帰国してから今は馬鈴薯は嫌いなものの一つになつてしまつた。

寒くなると思ひ出す。これくらいの寒さはあちらではなんでもなかつたのだが、人間は環境と気持ちの問題でこんなに変わるものだ。

シベリアの冬は長くそして夜も長い。どんなに寒い日でも雪の日でも休日以外一日八時間きちんと労働させられた。朝出掛ける時はまだ暗いし、夕方作業が終

わる頃はまた真つ暗である。零下四〇度の寒さではいくら防寒衣を着ていても、じつとしては耐えられない。作業出発のために若いソ連兵が人員点呼をする。もちろんそれまでに早くから並んで待つていなければならぬのだが、この点呼が非常に時間がかかるのだ。四列に並んでいるのだから縦横を数えればいいのに、彼らはどうしても一人一人数えなければわからない。何べん数えても人員が足りないという。五、六十人もいるのに一々数えるのだから大変である。いくら掛け算を説明してもわからないで、また「一人、二人」と数え直していく。今でこそ笑い話かもしれないが、真つ暗い寒さの中で長い間立たされているのは、全くやり切れないことであつた。みんなぶつぶつ言いながら足踏みして待つたものだ。

零下四〇度という寒さは今は想像もつかない。寒いとか冷たいとかいうものでなく痛い感じである。手足を動かしたり鼻や耳をこすつていなければとてもじつとしていられない。少し油断すると指先や鼻先はすぐ凍傷にかかつてしまう。それでなくても、栄養の足り

ない体は激しい労働と耐寒に徹底的にすりへらされたものである。

寒いことを書いたついでにもう一つ。収容所の便所は大小便共にみな七、八人一緒に入れる仕切りのないものである。はじめのうちはとてもきまりが悪くて中々用便も足すことができなかったが、慣れてくると親しみのあるものになった。両隣の戦友たちと故郷のこと、彼女のことなど話しながら、自由な時間を楽しんだ。もちろん、余りゆつくりしていると、全身震えるように冷たくなってしまうが、排便はだんだん高く積もってピラミッド状に凍っていった。だから便所の掃除といえば、凍りついて石のようになったものを鉄棒で打ち砕いて捨てることだった。全然臭くもないし、きれいな仕事である。ただ五、六月になって雪が溶けはじめると、捨てた岩石が正体を現わして処置に困ったものである。

今年もまた、ナホトカから引き揚げて舞鶴に上陸したあの十一月十日がくる。思い起こすと、祖国の山々は美しく、そして白い米の飯がおいしかったこと。

あれから五十年、迎えてくれた父母はいないが、世は平成となり、こうして平和な日を送っていることは本当にありがたいことである。そして私にとってシベリアの生活は今になって望んでもできない貴重な体験の一つである。

しかしながら北海の怒濤の中、戦いに散った幾多の戦友、あのシベリア極寒の地で、飢えと厳しい労働に栄養失調で眠るように亡くなった多くの同胞の冥福を祈る昨今である。

## シベリア抑留生活のあらまし

愛知県 横井 孝

まえがき

思い出せば、昭和二十年八月十五日正午、今は亡き昭和天皇の無条件降伏の放送がありました。当時、私は満州ハルビン第三六六部隊查形隊（教育隊）に所属、そこでソ連兵の武装解除を受けて牡丹江に向かいました。